HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	20世紀初頭日本がトルコに於いて行った 情報活動 ： 小林哲之助の事例
Author(s)	ウグル, アルトゥン
Citation	研究論集, 12, 67(左)-84(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51912
Type	departmental bulletin paper
File Information	004_ALTIN.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

20 世紀初頭日本がトルコに於いて行った情報活動：小林哲之助の事例

ウグル・アルトゥン

要　旨

日本は 19 世紀後半の開国以後，資本主義社会の一部となっていく過程において，活発な情報収集活動が行われた。その一つとして当時のオスマン帝国を訪れた記録も残されている。彼らが当時書いた自身の日記や紀行，新聞記事，そして手紙でのやり取り等は今も数多く現存しており，これらが日本におけるトルコに関する知識の基盤となったと推測される。よって，これらの資料は日本とトルコの関係を検討する上で重要になると考えられる。

1911 年にイスタンブールに留学に来た小林哲之助はトルコの政治的，軍事的，外交上の事情を新聞や外務省にレポートを送るなどの形で伝え，日本に於いてトルコに関する情報を創造する先行者の一人であった。小林が集めた情報は当時のトルコの事情をあらゆる場面で取り上げる上でかなり重要だと思われる。

外務省職員であった小林哲之助は，本国より奨学金を得てトルコに留学した。彼は留学生という身分ながら，トルコ国内でその周辺諸国である東ヨーロッパやバルカン半島の事情をレポートし，これらの情報は大阪朝日新聞の鳥居素川と連絡を密にとりあった。鳥居素川の協力の下それらの情報を「ガラタ塔より」という書籍にてまとめている。その中には，小林哲之助がトルコに留学している間に勃発した伊土戦争，バルカン戦争や第一次世界大戦についての内容が詳細に記されており，当時の東ヨーロッパやバルカン半島の様子を知る為にも貴重な資料だと言える。

本論文は二章で成り立てて，第一章では第一次世界大戦の前の日本とトルコの陥った状況や国際社会での一付けを考察する。こうやって歴史的背景を構成しながら両国の世界システムにどのような影響を与えて，どういった役割を果たしているかは論じる。

また，第二章では小林のトルコに関する観察を取り上げるとともに伊土戦争から第一次世界大戦に至たるまでの時期を検討する。小林が書き残した書籍「ガラタ塔より」，外務省のレポートや論文等を基に日本の外交官が見るト

ルコのイメージと，このイメージの伝え方や伝達手段，トルコに於ける小林の情報ネットワークに触れながら，小林の活動の目的や，日本のトルコ観に与えた影響を取り上げる。

トルコで日本に関する研究はまだ始まって日が浅いにもかかわらず，短期間で著しく発達した。トルコにおいてあらゆる場面で，日本研究の分野は日増しに広がっていく。今までの研究では日本の文化，歴史，言語，文学，日土関係，経済学等の分野の研究が注目されている。特に日本史や日土関係史の研究に日本語を知る研究者が関心を寄せている。よってまず最初に日土関係史に関する先行研究に触れることが必要であろう。

明治維新が良い成果をもたらし，産業が発展した日本は西欧諸国と同じく市場や資源を求める。帝国主義国家として新規参入をはたす。他方でオスマン帝国が大国として扱われなくなり，西欧諸国によってどのように分裂されるか議論されるようになる。

日本は近代化の過程では西欧諸国にならった。1870 年代から国内一体化と統一性の成立につれて日本の領土の拡張に関して計画され，意図的に実行される。

明治維新はオスマン朝において近代化の見本としてとらえられた。西欧諸国から「病人」と呼ばれたオスマン朝が JönTürk 革命の後自らを「近東の日本」と考えるようになる[1]。西欧諸国の近代化の波に乗り遅れたオスマン朝においてはアジアの一国として日本，日本の近代化が予想以上の多大な影響をもたらし，日露戦争においての日本の勝利によってこの影響が強化されたと考えられる。

しかし，日土関係の歴史上の経緯を考察すると 20 世紀前半において多くの変動があった。地理的距離とともに日本とトルコ側の状況と政治的態度が両国関係の発展を妨げる。当時両国ともに領土における変化や，政治的変革を経験した激動の時代であった。

トルコにおいて日土関係に関する研究が 20 世紀の後半に盛んになり，数少ない研究者の貢献によって発達した。その数少ない研究者の一人である Selçuk ESENBEL が書いた「日本のオスマン朝に対する関心」では明治時代において日本がオスマン朝にどのような関心を寄せていたかが取り上げられている。

この論文では両国の関係の構造を二つの時期に区別して検討し，日本の政治的傾向が両国関係に及ぼす影響に触れている。一つ目の時期は 1868 年から 1890 年代にかけてそのあいだの期間で不平等条約を撤廃しようとする際に，同じ状況に陥っていたオスマン朝の西欧諸国に対する態度を分析した過程を示している。二つ目は 19 世紀の最後の 10 年から第一次世界大戦が勃

[1] RENEE, Worringer, "*Sick Man of Europe'' or ''Japan of the near East''?: Constructing Ottoman Modernity in Hamidian and Young Turk Eras,* ***International Journal of Middle East Studies***, Vol. 36, No: 2, 2004, pp. 208

発するまでの日本がオスマン朝に対する政策を帝国として実施した時期である。この論文はオスマン朝を訪問した使節団や旅人，日土関係を樹立した重要な事件である「エルトゥールル号遭難事件」，日本のアジア主義や回教政策にも触れているという点で重要である[2]。

Esenbel のもう一つの論文「A Fin de Siécle Japanese Romantic in Istanbul: The Life of Yamada Torajiro And His Toruko Gakan」は日土関係史の研究に非常に大きい役割を果たした。この論文では日土関係の樹立に奔走した人物として山田寅次郎（山田宗有）の 1892-1912 年間のオスマン朝地域で行った活動やその内容を分析し，明らかにしている。描かれたオスマン朝の状況は日本でなされた初めてのトルコに関する記述であって，日本におけるトルコのイメージを構築したという点で欠かせない存在である。山田が日露戦争の際にロシアに関する情報を日本側に伝えたことを明らかにする上でも重要である。

日土関係史に関してもう一つ重要な書物は Hüseyin Can Erkin「Geçmişten Günümüze Japonya'dan Türkiye'ye Bakış」である。この論文で作者が日土関係に於ける 17-18 世紀頃から近代までの経緯を取り上げる。日本の世界観におけるトルコの位置づけが時代によって変化する過程またその認識変化の原因を研究している。日本人の世界観が三つの時期に区別され，これらを伝統的な認識，西欧諸国の影響下での認識や日本ファシズム下の認識というふうに検討する。さらに近代以降日本政府が送った使節団や旅人それに作家達によって反映されたトルコ認識の解明を試みている[3]。

Ali Merthan Dündar「Panislamizm'den Büyük Asyacılığa」ではアブヅルハミッド二世時代に実行された Panislamism 主義を両国共通の敵国としてロシアに対して利用することで日土関係の発展に貢献したことを取り上げて居る。又，日露戦争で勝利した日本がアジア主義思想の形成によって失敗に終わった過程が検討されている。日本の海外に関する情報の獲得方法，諜報組織や組織の構造に関して詳細に解明されている。日本の東トルキスタン，ロシアや中国に於いて行われた情報活動（イスラム教徒も利用される）や両国が実行しようとしたプロパガンダ活動にも触れているという点で注目に値する研究である[4]。

これまで両国の研究者によって日土関係史に関してなされた研究にが，トルコと日本の関係の始まりと発展した時期が明らかになったとは言える。しかし，まだまだ研究されるべき論題が数多く残されているのも事実である。

日本が世界市場に導かれ，資本主義社会の一部として台頭した 19 世紀前半から海外に於ける

---

[2] ESENBEL, Selçuk, "*Alacakaranlık Diplomasisi: Japonların Osmanlı İmparatorluİu'na İlgisi*" ***Toplum ve Tarih***, No: 218, İstanbul, 2002

[3] ERKİN, Hüseyin Can, Geçmişten Günümüze Japonya'dan Türkiye'ye Bakış, Vadi Yayınları, Ankara, 2004

[4] DÜNDAR, A. Merthan, Panislamizm'den Büyük Asyacılığa, Ötüken Neşriyat, Ankara, 2006

情報収集活動も活発化した。諜報員が当時書き残した個人的な日記や紀行，新聞記事，そして手紙でのやり取り等は今も数多く現存しており，これらを調べることは日本の近代化の過程や外交政策や諸外国に対する政策を作る際にどのような影響を及ぼしたかを明らかにするために重要である。

情報活動を行う人は軍人であれ，外交官であれ，情報の正確性と影響力を重視される。それにもう一つは情報の信憑性である。本論文では 1911 年に留学を目的としてトルコにわたり，トルコの政治的，軍事的，経済的，外交上の状況を新聞記事や，書籍，外務省に送ったレポートなどの形で伝えた小林哲之助が行った活動の内容を検討するものである。小林哲之助の活動に関する先行研究は存在しないが，小林の活動の時期はバルカン戦争や第一次世界大戦を含む 1911-1922 年間というオスマン朝にとって危機的時期に当たるため，小林の当時オスマン朝に関する観察を取り上げることは非常に有益なことであると思われる。

本論文は二つの章から成っており，第一章では第一次世界大戦前の日本とトルコの陥っていた状況や国際社会での位置付けを考察する。このように歴史的背景を構成しながら両国は世界システムにどのような影響を与えて，どういった役割を果たしているかを論じる。

また，第二章では小林のトルコに関する観察を取り上げるとともに土伊戦争から第一次世界大戦に至たるまでの時期を検討する。小林が書き残した書籍『ガラタ塔より』，外務省のレポートや論文等を基に日本の外交官が見るトルコのイメージと，このイメージの伝え方や伝達手段，トルコに於ける小林の情報ネットワークに触れながら，小林の活動の目的や，日本のトルコ観に与えた影響を取り上げる。

第一章：第一次世界大戦が勃発する前の日本とトルコの状態

明治維新と共に国際社会の一員として日本政府，日本軍が情報活動を積極的に展開し始める。これと関連してアジア諸国（韓国，中国，インドネシア）を主として，欧米諸国に対しても情報活動を行う。これらは十九世紀の終わりから二十世紀の初頭にかけて拡張政策に従って活発化したと考えられる。また当時，ペルシア，エジプト，バルカン半島やトルコを含む中近東・東ヨーロッパにも日本側は関心を寄せている。しかし，日本が中近東や東ヨーロッパにおいて行った情報活動の実態については研究があまりなされておらず，バルカン戦争の勃発によって初めてこの地域が日本陸軍の注目の的となる。陸軍や外務省によって東ヨーロッパやオスマントルコを含む近東地域での情報がもたらされる。バルカン戦争を第一次世界大戦の引き金だということを考えるとバルカン戦争が世界秩序に及ぼした影響を理解することは非常に重要だと思われる。

トルコの状況

19 世紀後半新しい世紀の始まりは日本とオスマン朝両国にも多大な変化をもたらす。実際この変化は 18 世紀から変わり始めた国際秩序に対する反響や反応を伴う原因となる。これの要因の中で一番大きい影響をもっているのが産業革命でヨーロッパ諸国の急激な変化や発展と結果となる。当時のヨーロッパの思想は産業革命に伴う機械化の流れの前に廃れ，物質至上主義と資本主義が人々の世界観を支配するに至った。

18 世紀後半から 19 世紀の初頭に至って実現した産業革命はヨーロッパ諸国の領土拡張的欲望を刺激する。それに伴って資源や新しい市場の獲得に力を尽くし，植民地化活動を世界全体で行い始める。獲得した市場や植民地は経済的な発展や豊かさをもたらし，技術発展によって軍事力も発達する。

このような急激で幅広い変革が政治的，イデオロギー的な変容のきっかけとなる[5]。ヨーロッパで起こった革命の影響を受け，世界全体で直接的－間接的な変革が起こった。世界各地に進出し，植民地化していた西欧の勢力下の国々では経済的，領土的支配が実行される。

植民地化は昔からある現象にもかかわらず 19 世紀以来増加した。植民地化は長い歴史をもっていても西欧の産業革命後の社会的，経済的な問題の解決方法として実行された点において新しいと思われる。特に独逸や伊太利では国内統合の後に植民地化活動が以前と比べて活発化した[6]。西欧諸国はアフリカ，アジア，オセアニア地域で後進国の植民地分割り競争を展開することになる。

オスマン朝や日本も後進国として西欧諸国の脅威に直面する。しかし危機の内容が同様であっても両国の反応は異なっていた。この原因として両国の社会構造と国家構造の相違があることが挙げられる。

両国共に西欧諸国と比べて産業，技術，経済や軍事力で遅れていた事が西欧諸国の相手として不利な状態に置かれる結果をまねくこととなる。オスマン朝でカピチュレーション，日本では「不平等条約[7]」と呼ばれている経済的，法律上の特権条約が西欧諸国によって負わされる。この不利な条約はオスマン朝の衰弱の最も直接的な原因だと思われる。不平等条約の日本に

---

[5] MCNEILL H. William, Dünya Tarihi, İmge Kitabevi Yayınları, Ankara, pp. 585

[6] SANDER Oral, Siyasi Tarih Ilkçağlardan 1918'e, İmge Kitabevi Yayınları, Ankara, 2009, pp. 226

[7] 不平等条約：強国が相手国に対して結んだ条約で，一方的に利益を享受，または義務を課する内容をさす。一六世紀にキリスト教国が，イスラム教国との間に片務的領事裁判制を設定したのが起源と言われる。近代に入ると，一九世紀に先進資本主義列強のアジア進出に伴い，アヘン戦争やアロー戦争を通じ，武力を背景に列強が清国と締結した開国条約（南京条約，北京条約）や，わが國との安政五か国条約を典型とするように，不平等の内容は拡大され，協定税率制や租界，課税免除権や内地旅行権などの形をとって行われた。（日本大百科全書，20 巻，pp. 475）

とっての問題点は第一に治外法権すなわち領事裁判権の承認であった。外国人の犯罪は日本ではなくその国の領事が裁判することとなっていた。また，関税が低く抑えられていたために，日本は高めの地租を設定せざるをえず，それが政治的不安につながるという悪循環を招いていた。また関税自主権の欠如が，国内産業育成の障害となったのは言うまでもない[8]。日本のこういった不利な状況や立場は特に産業育成が達成されないという経済的な問題と連携し，政治的な不安に伴う社会的な不満となって現れたと思われる。

日本の政治家は明治期において外交上最も困難な問題として不平等条約の改正を挙げている。この困難を解決するために欧米諸国に数多くの使節団や観察者を送り，とるべき方針を明らかにする。

他方でオスマン朝ではカピチュレーション（特権条約）は十五世紀にベネジアやジェノバ共和国に与えられた特別特権に始まる。次いで 1535 年オスマン朝とフランスのあいだで締結されたカピチュレーションは一種の貿易条約だった。これは初めてのカピチュレーションだと見なされている。十七や十八世紀ではフランスやイギリスだけがカピチュレーションの更新が認められ，最恵国待遇をはじめとして，様々な特権を獲得する。当初カピチュレーションは一方的に拒否することができていたが，本格的な条約となった後拒否する事できなくなる。外国人は少ない課税で自由に貿易し，外国製品が輸入された。この状態は日本の例でも見れるように産業や経済の発展に非常に大きな妨げとなった。

経済的な未熟さや改革の失敗により十九世紀の半ばのオスマン朝には軍事的，外交的自衛手段が不如していた。1854 年に勃発したクリミア戦争はイギリスやフランスの援助で勝利し，オスマン朝がヨーロッパ諸国の保護下に置かれる。これはオスマン朝の当時の衰弱をよく表している。クリミア戦争後実行された，Tanzimat Fermanı の拡大された続きだと思われる Islahat Fermanı というイスラム教以外の民族に対する権利付与政策などの計画によって国内一体化を図ったにもかかわらず，国の発展につながらなかったことも，その一例である。

1877 年のバルカン半島に於けるオスマン朝に対する反乱がロシアを刺激する。ブルガル人の反乱に付随して勃発したエルビア戦争ではオスマン朝が勝利するが，ヨーロッパで反オスマン運動の活発化を招くこととなる。その結果として 1877-1878 年に土露戦争が起こる。戦争で負けたオスマン朝の運命はベルリン会議での列強の決定に任された。

オスマン朝はベルリン会議以前に所有していた地域の 2/5 に当たる地域を割譲し，人口の1/5 に当たる部分を手放すことになった。当時はオスマン朝をロシアに対して保護する方針だったイギリスもベルリン会議でトルコ側に立たず，地域や庶民，資本を失ったこの大敗北はオスマン朝の状況を非常に悪化させた[9]。

---

[8] 北岡伸一，『日本政治史』，有斐閣出版社，東京，2011，pp. 78-79

[9] SHAW J. Stanford & SHAW Ezel Kural, 2002, pp. 191

ベルリン条約にはトルコ・ロシア双方が満足していなかった。このことは，今後起こるバルカン危機の原因又は第一次世界大戦の基盤となる[10]。なぜならバルカン民族間の問題はオスマン朝に直接的な影響が及ぼすとともにヨーロッパ諸国のこの地域に対する政策を決める際に非常に重要性を持っていて，この危機は第一次世界大戦の初歩段階と見られるバルカン戦争の原因となる状況の基盤となったからである。

ベルリン条約から第一次世界大戦にかけて，オスマン朝は 1897-1898 年のギリシャとの戦争で勝利したにも関わらず，1911-1912 年伊土戦争でリビア地域を割譲しもっと深刻な 1912-1913 バルカン戦争に直面する。

小林哲之助のオスマン朝に於いて行った活動内容

小林哲之助は，オスマン朝（トルコ）の激動期であった 1911 年，外務省職員として，本国より奨学金を得てトルコに留学した。彼は留学生という身分ながら，トルコ国内でその周辺諸国である東ヨーロッパやバルカン半島の事情を調査し，これらの情報は大阪朝日新聞の鳥居素川と連絡を密にとりあうことによって日本に伝えられた。鳥居素川の協力の下それらの情報を『ガラタ塔より』という書籍にまとめている。その中には，小林哲之助がトルコに留学している間に勃発した伊土戦争，バルカン戦争や第一次世界大戦についての内容が詳細に記されており，当時の東ヨーロッパやバルカン半島の様子を知る為の貴重な資料である。

明治 1889 年柏崎に生まれた小林は東京外国語学校を卒業し，1911 年に外務省留学生試験を合格し，外務留学生としてイスタンブル行きを命じられた。1914 年に第一次世界大戦が勃発したせいでイタリアに異動，1919 年パリ講和会議全権委員附を命じられる。一時的に東京で新聞海外記者として勤務した後，1921 年に外務省の嘱託としてトルコへ出張し，トルコにとって非常に重要なローゼンス平和会議に全権委員附員として参加する。留学生，通訳官，外交官，新聞記者として活動した小林哲之助は英語，トルコ語，フランス語やスペイン語を自由に使いこなすことができた[11]。

小林がトルコに派遣された 1911 年にイスタンブル在住の日本人は四，五人足らずだった。日本とトルコの貿易事業を発展させるために 19 世紀末にイスタンブルに於いて創設された中村商店の社員である中村栄一や彼の息子，そしてイスタンブルに派遣された駐在武官である村岡長太郎やオーストリア公使館付武官の森岡守成などである。注目すべきは日本とオスマン朝との間に外交関係が樹立する以前に，1907 年 6 月から日本陸軍よりイスタンブルに派遣された駐

[10] SANDER Oral, Siyasi Tarih Ilkçağlardan 1918'e, İmge Kitabevi Yayınları, Ankara, 2009, pp. 315
[11] KIYOTA Tamura, ***Echigo Taimusu***, 16.06.1931

在武官の存在である[12]。

日本の陸軍が参謀本部の武官をオスマン朝に派遣する理由としては，オスマン朝に於いて勢力を拡大していた西欧諸国の存在やバルカン諸国に於ける暴動と独立運動の観察の必要性が挙げられる。当時，中国分割を活発的に行っていた西欧諸国は中国よりも近い地域であるオスマン朝の領域の獲得を目指していた。西欧諸国がこの地域で行ったこうした活動が西欧諸国同士の植民地獲得競争を生み出したという事実があり，日本はこれらの調査をすることによって自身の利権拡大の機会を狙ったと思われる。

小林はイスタンブルにいる日本人の様子を次のように述べている。

「當君府〔筆者注，イスタンブール〕にも二三年前には，五六人の日本人がいたさうだが，今は中村栄一氏と同氏子息と僕と僅か三人きりだ。スケーテングの教師だと云つて，エジプト邊からやつて来た男が居たが，今どこに居るかわからん。當市は昔からごたごたのあつた土地だから，トルコ，ギリシャ，アルバニア，アルメニア，ジュデア，歐洲各国人，アジア，アフリカ人等，殆んど世界の人種を網羅して居る。而して其中に僅か二人や三人の同胞とは，聊か心細い気持もする。(略)

河の如き金角灣の奥まで，自由に軍艦の出入するのは日頃羨ましく思つて居た所であるのにオデツサ行きの汽船が，灣の中程に碇泊してたのは意外であった。森岡氏を見送りに来た一英人と僕とは致方なくボートにのつた。(略)汽船の食堂で三人話して居つたら中村氏の子息は赤帽でやつて来た。生まれたばかりに母を失つた彼は，君府を故国と思つて居るらしい。トルコの将校の家に養はれて居るので，一つも日本語を知らない。(略)君府在留の日本人は前述の如くだが，ウィーエン邊から歐洲漫遊の序に，立ちよらるる人はちょいちょいある。[13]」

当時のイスタンブルでは日本人の数は少なかった。小林の記述から分かるように時々訪問に来る武官以外には小林を含めて四人に過ぎない。小林が名を挙げている森岡は三年間オスマン朝で武官として活動した人物で，イスタンブルを訪問する当時はオーストリア駐在武官として働いていた。森岡がバルカン半島や小アジア方面を詳しく知っていて，小林にとって重要な人物だと言える。

鳥居素川がイスタンブルを訪問した時に案内したのは小林で，両者ともにオスマン朝と中国の類似性を指摘している。小林が鳥居との話を次のように述べている。

「先日大阪朝日の鳥居氏は，「まるで支那だ」と云はれたが，支那地だか露領だかわけのわからん所を汽車で通ったのみで，支那を知らざる僕には何とも云へない。ただ両国共昔

---

[12] メルトハン・デュンダル，三沢伸生，『イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の事例研究：徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中心に』，東洋大学社会学部紀要帝 46-2 号 2009 年 3 月，pp.192

[13] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 2-4

の大帝国で，互に紛擾の絶え間のないのは，甚だ似て居る。先日まで内乱でごたごたしてた土耳其はまた伊太利と衝突した。さうかと想つていると，一方支那では革命だと云ふ。頗る面白い。この両大国の将来は，大に研究すべき価値あると思ふ。[14]」

小林は中国やトルコなどのアジア諸国の衰退を指摘し，中国の国情に関する調査は数多くあるにも関わらず，実際に関係が少ないオスマン朝の国情を知っている人がほとんどいないという事実を憂慮していた。

「吾人が既に世界の大國民に列した以上,眼光をも世界大たし歐洲の噴火口たる土耳其の赤帽諸君子の活動振に多少注意を払ふ必要があると思ふ。(略)バルカン全半島を平定し更に船艦を整へて地中海の商権を握りアフリカ，シリア小亜細亜及黒海沿岸に号令せるオットマン帝国が如何にしてかかる現状に至つたであらうか。現代の大国研究が必要であるならば，現代の老大国研究も亦必要であらねばならぬ。亡国研究の材料は少くない。支那も可ならん，西班牙も妙なり，而して土耳其も亦屈竟の材料たるべく十分の価値があると思ふ。そは兎に角，今最近の政変に就いて報道せんに，土耳其内閣は常に水に浮ぶ浮萍の如く動揺定りなく大臣の更迭等絶え間ないが，今回の政変は大に注目すべきものである。[15]」

『ガラタ塔より』の最初の部分ではオスマン朝に於ける反乱や衰弱の原因に触れている。

小林が上の文章の中で指摘している政変によって 1911 年七月の立憲君主体制成立後に生じた政治構造の無秩序さが明らかになった。具体的に言えば，政権を握った青年土耳其党内部での意見の衝突がオスマン朝に内外的な危機を及ぼす切っ掛けとなる。伊土戦争が勃発する前，内部における政治的混乱やバルカン半島に於ける反乱が続いている。

小林はこのような対外的，国内的に問題を抱えるオスマン朝の危機的状況を嘆いている。バルカン半島での反乱，イタリアのトリポリ（現在リビア）に於ける勢力拡大，ドイツ，イギリスやロシアのオスマン朝においての影響力の増大など，対外的危機に面した時期に国内の調和を図る事が出来ず，一触即発の政治情勢にある国家の状況やその未来を懸念している。

オスマン朝の内面の衰弱が国際問題に繋がる。オスマン朝の弱体化に乗じて，イタリアがリビアを植民地化し，伊土戦争が勃発する。小林は自身の記述の中で伊土戦争についてこのように述べている。

「伊太利は老土耳其に於ける自分の分け前として久しく其對岸阿弗利加のトリポリを渇望して居つた。之に対し土国は伊国の平和的侵入を防遏せんと努めつつあつたのであるが，アルバニア地方の反乱止むか止まずに此二国は問題の土地を実力の審判に任すの不得意に至つたのである。伊国は九月廿六日トリポリ及びチレナイカに於ける不秩序及び怠慢，伊国人に對する反對及び政治運動などを詰問せる通牒を土国政府に致した。。。土国政府は二

[14] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 5
[15] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 9-10

十九日朝該通牒に對し回答をなした。曰く，土国政府は常に条約を尊重し伊国の利益を防護した。経済上の特許に関しては直ちに協議すべし，伊国政府にして若し之を拒絶し直ちに軍事的占領をなすが如き事あらば其責任は全然伊国にあるべし云々。伊国は之に對し同夕七時土国は満足の答をなさざるを以て直接自国の権利及利益並に国家的権威を防護するの不得意に至つた旨を告げた。之は伊国閣議が土国と九月二十九日午後二時三十分より交戦状態に入る旨を決議した結果で，斯くて，とかくの批評ある伊土戦争は開始せられたのである。[16]」

小林はイスタンブル到着直後に勃発した戦争をマスメディアから追跡し，他方で戦略上重要な所だと見なされたイズミルを訪れる。トルコ軍隊の演習も見学し，アナトリアの内部まで電車で旅行する。小林がこの旅行に出たのは伊土戦争が勃発して一ヶ月も経っていない頃であった。当時イタリアがロドスを含めドデカネス諸島を占領し，チャナッカレ海峡を通ろうとしていた。七月に行った占領から一ヶ月も経たない内に小林がこの土地を訪問したのは，この地域の状況を自分の目で確認したかったからである。

「アレキサンドリア行き露西亜汽船オデツサ号は午後五時君府を出帆し，今しも隈なく照らす満月の光を浴びながら，鏡の如きマルモラ海を横切りつつあつた。この海は日本の地圖などでは大抵小さく書かれて居るが実際は東西四十五里二町餘，南北十六里四町もあると云ふから，なかなか大きい。しかし黒海の口はボスポラス海峡で鎖ぢられ，多島海方面はガリポリ半島まで閉めきられてあるから，その實物を知つて居る以上，これを一つの大きな池と見ても差支ない訳だ。

(略)さては最早海峡を通り越すのではあるまいかと窓から覗くと陸がすぐ近く見えたので早速甲板へ上つて見ると船はまさにナガラの鼻を廻つてカレイソルタニー港へ向ひつつあつた。後を振り向けば土耳其軍艦が四五隻悄然とダーダネルスの朝風に半月旗を翻へして居るのが如何にも憐れに見えた。

新戦場は何処だらうなどと両岸のチャナカレー砲台を見詰めてるうちに船は早や海峡の出口へ来た。案内の小蒸汽船は我が船をすててとつとつと先に進む。彼方には白くまたは黒く塗られた数隻の汽船が列をなして待つて居つた。

「遠く薄青く見えるでせう，あれがイムブロス島です，遊猟地として有名です。」

「こちらはテネドス島ですか」

「さうです，すぐに町が見えるでせう」

「町はあるけれども木は少しもないやうですね，實に見すぼらしいではありませんか」などと乗り合せた唯一人の英人と暇潰しに話をして居るうちに船はミチリン島近く進んだ。この島は伊土戦争に関連してちよいちよい注目された点から少からず僕の好奇心を刺

[16] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 7-9

載した。[17]」

目的地であるイズミルは当時イスタンブルについで二番目に賑やかな町であった。活気のある港町であり，アナトリア半島の南部にあるアダナまで伸びでいる鉄道網のおかげで貿易上重要な拠点になっており，またトルコ艦隊がイズミル湾に所属していたため伊土戦争に於いても戦略上大変重要であったと言える。さらに，ロドス島やドデカネス諸島の占領の後エーゲ海に面している大都市として注目されていた。

小林は旅行中一人のイギリス人と行動を共にしており，オスマン朝に滞在していた武官である森岡や日本支配下の台湾からアヘンの実態調査の為インド，イラン，オスマン朝を訪問した家永豊吉も旅行中に在日英大使 Ernest Satow の援助を受けている[18]。

イズミル視察後小林がカサバ鉄道でゲディズ，アラシェヒル，ウシャック，アフヨンカラヒサル，コンヤ方面に敷設された鉄道の状態やルートを確認している。こうしてオスマン朝に敷設されてある鉄道の地圖を描き，日本に送る報告書に付け加えている。更に，小林が注目しているのはバグダット鉄道の状態やこの鉄道に於ける敷設権利をもつドイツの投資状況，政治的，経済的ヘゲモニーであり，これについてふれているのは日本で最初である。

小林は八月までにエーゲ地域や中央部の視察を済まし，森岡や村岡とイスタンブルで会談する。伊土戦争が長引く中バルカン諸国の不満が高まりつつあった時期である。バルカン諸国の不満がロシアの支援を背景にして，少しずつ本格的な反乱となる。バルカン半島にむかっていた小林がイタリア人の助言を聞いてアルバニア旅行を延期し，セラニックに行く事にする。

> 「アルバニアなんぞ今少し後にし給へと，先帝に仕へたとかの関係で君府在住を許されてる年とつた伊太利人が忠告する。なる程馬鹿らしいかもしれん，多少鎮まつたとは云ふもののまだ現にダイナマイトが白昼公然横行してやるやうだから。しかし又少々おつかな喫驚の所に一種の好奇心が湧く。成佛してはあまり結構でないが片脚位の所ですむ事ならよい記念になる。とにかく行つて見ようと決定したのは八月三十一日，新天長節の日であった。例に依つて當夜は君府在留同胞一同（但し三名）村岡氏の宅に會し，陛下の萬歳を祈り，大に祝した。あまり祝し過ぎたので少々頭がふらふらするが，漸く支度を終り，出発が早急な為めあきれて居る同宿の連中をあとにして翌日の夜行で君府を出発した。
>
> （略）小亞細亞ではイスミットから君府来る時一度巡査に問はれたばかりであったが，今度は僅か九時間ばかりの間に二回訪問をうけた。停車場に赤帽が少なくまた其徽章が一寸わからないので，赤帽を戴いてる土耳其連中が「君，赤帽かい」と赤帽に聞いて居ったのは一寸可笑かった。（略）早く床に就き一寸眠って眼を開けたら誰か部屋へ入つて居る。「何

---

[17] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 15-17

[18] ERKİN, H. Can, Japon Gezgin İenaga Toyokichi'nin 1899-1900 Anıları, OTAM, Sayı 13, Ankara, 2002, pp. 240

だ」と云つたら小使で，巡査が旅券を要求して居るとの事であつた。僕は大に癪にさわつたので，「今時分何だ，僕は大日本國民だ，用があるなら巡査に此処へ来れと云へ」と怒鳴つた所が，二名の巡査を連れて来た。然うして別段用事もなかつたので少々張合がぬけた。[19]」

このセラニックへの視察の頃，オスマン朝とバルカン諸国間の戦争の危険性が高まっており，各国の軍事演習が始まっていた。バルカン同盟が結ばれ，バルカン諸国は次々と演習を始める。イタリアと戦争状況にあったこと，及び内部に政治的な問題を抱えていた事はオスマン朝がバルカン諸国に対して強硬姿勢を示すことができなかった理由であると思われる。戦争が起こる前，の小林の考えが次の通りである。

「（略）外は伊太利と長き戦に疲弊し内はリベラルとコミツテイと相争ひマセドニヤ新たに紛擾を醸さんとす，乗ずべきは将にこの時この機会と思ひ込んだは当然の事だ。而して多年土耳其に対して不平を懐けるギリシャ，セルビア，モンテネグロの諸国を糾合し山椒は小粒でも辛い，老耄土耳其に一泡ふかさんと計画したはソフィア政府の意気込み盛なりと云はざるを得ない。

暫く眼を転じて同盟に加はりたる他の諸国を見んか，先づ第一に半島の先端に位し古代文化の中心たりしギリシャは如何。彼が土耳其と犬猿の間なるは今日に始まつたことにあらず，實に土耳其建国の歴史に遡らなければならない。彼は君府を土耳其に一時貸したのだと考へて居る，今日はまことに憫然たる有様だが，他日また花咲く春のめぐり逢はん事を信じて疑はない。殊に最近一八九七年の恨みがある。一人立ちは目下の所一寸考へ物であるが四箇国同盟なら大に意を強うするに足る。多年の恨み思ひ知れと少々おつかな喫驚ながら足を踏みしめたのは健気とすべきである。[20]」

すでにイタリアとの戦争状態であった上にバルカン同盟が形成されたことで，オスマン朝はさらに困難な状況の下に置かれることとなり，さらに国内の問題も未解決のまま取り残されていた。上記の事情は小林の記述の中でよく表れている。小林は伊土戦争が終結されないままにバルカン同盟と戦争状態にはいる瀬戸側であったオスマン朝の状態を懸念している。バルカン諸国はトルコ政府が確約した改善をルーマニア以外の国に実行していないという理由で列強に苦情を申し立てることで，正当性を確立し，列強の介入を求める。結果として列強はオスマン朝がこういった改善をバルカン諸国において実行するように要求する。これに対するオスマン朝政府の返事はこれはあくまでオスマン朝の内政問題であると強調し，その上でこの問題を出来るだけ早く解決する意志を示し，列強の介入を阻止したのである。

こうした外交的術策も失敗におわり，バルカン同盟の最後通牒の後の出来事が小林の記述で

---

[19] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 26-29

[20] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 34-35

次のように明らかになる；

「十月十五日午前十時首相は大臣会議を召集し最後の決議を求めた。巴爾幹〔バルカン〕列國がなしたるマセドニア改革の通牒及び希臘が送った,「二十四時間以内に船舶を放免せよ」との通牒に就いて議せられた。さすが重大會議の事とて意見百出容易に決定しなかったが終にかかる傲慢無禮の通牒を発する巴爾幹諸国と尚ほ国交を継続するは土耳其政府の威厳を損するものなりと決定し，而して即刻巴爾幹諸国国駐剳土国公使へ引上を命じた。

かくの如くして事局は急転直下し，本日即ち十月十七日早朝土国政府はブルガリア及セルビア公使に,「貴国と土耳其との関係は最早持続不可能なれば，旅券を受取り早速土国を去られたし」と告げた。宣戦なくとも今や戦争開始は明々白々の事実である。實に各国が動員を始めてから十有七日目である。

外交談判が終つたのみならず，今朝既にブルガリア及びセルビア境界に於て戦争開始せられたりとの報あり，随分待遠かつたが愈々血の雨を降らす事になった。其時また一飛報あり，曰く,「去る十五日伊太利と講和締結せられたり」と。伊太利にも好き機会なりしが，土耳其にも甚だ幸ひである。これで少しは荷が軽くなつた訳だ。

片手に戦闘，片手に講和，両手に花を握つて世界の耳目を集中せる活舞台にのぼらんとする土耳其の武者振，勇しからぬでもないが，聊か末が案じられる。今後戦局の如何に発展するかを読者と共に刮して見よう。(註，希国は十七日土国に宣戦せり)（一九一二年十月十七日)[21]」

バルカン同盟が成立し，十月八日一九一二年に第一次バルカン戦争が勃発する。すでにイタリアとリビアで戦争をしていたオスマン朝は，第一次バルカン戦争が勃発するとイタリアと講和条約を結ばざるを得くなる。土軍がアラブ人の組織化に成功した後，イタリア軍に対していくつかの勝利を収めたにもかかわらず何千キロも離れている地理条件を考慮するとイタリアと講和条約を結ぶ事が合理的だったと考えられる。小林の伊土講和条約についての通信は次の通りである；

「伊軍のリビア遠征案外捗々しからず反つてアラブ人の強襲偶々成功する有様であつたので土耳其はあまり講和に耳を傾けなかつたが，巴爾幹の風雲次第に険悪なるを見るや速に伊国との問題を解決するのを要あるを悟り，茲に両国委員は非公式に会見する事となり一九一二年七月以降屢々瑞西ウーシーに於て會議を重ねて居つたが，遂に巴爾幹列國と土国との外交断絶せんととしつつあつた十月十五日伊国委員ベルトリニ・フジナート及ブオルピ，土國委員ナビー・ベイ及フアレツデン・ベイ間に於て講和条約覚書に調印せられ同十八日本条約に調印せられた。其大要左の如し。

（一）敵対行為の停止　（二）互に撤兵する事並に俘虜を交換する事　（三）敵対せる

[21] 小林哲之助,『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 49-50

住民の大赦　（四）諸条約等の復旧　（五）土国が他国とも同様の条約を締結した場合に実施せらるる条件に於て,伊国は他日土国と歐洲公法に基き通商条約の改訂を約し,又伊国は従課税を一割五分に引上ぐる事，及び石油，巻煙草紙，燐寸，アルコール及びカルタの専売若くは其消費附加税賦課に同意する事　（六）他国が土国内郵便局を撤去せば伊国も同時に之を撤去すべく，又伊国はカピチユレーシヨン撤廃を援助する事　（七）解雇せられし伊国人を諸官庁等に採用する事　（八）伊国政府は二州の歳入より土国管財會議へ向けられし額の戦前三年平均額を年々同會議に支払ふべく而して該年金額は二百萬利（伊貨）を下らざるべし，云々[22]」

ウーシー講和条約によって北アフリカでの最後のオスマン領域は失われることになるが，当時のオスマン朝の首都であったいすたんぶるに近い所で起ころうとしたバルカン同盟との戦争がより優先すべき条件であったと思われる。小林はウーシー講和条約の内容，また条約の重要性を書き残している。

上で述べたように小林は伊土戦争中にイズミルまた中部アナトリアを観察をしたあと，イスタンブルで村岡長太郎，森岡守成と会談し，セラニックへ視察に行った事が分かる。村岡長太郎は日本軍から派遣されて,土軍に従軍してバルカン戦争に参加した[23]。小林はこの会談でバルカン諸国とトルコの軍事的状態について様々な情報を手に入れたと思われる。小林と村岡はオスマン朝政府はリビアをイタリアに割譲しただけではなくて，バルカン戦争でもいずれヨーロッパでの領土を失うだろうと確信していた。

小林はバルカン戦争期間中，刻々と変わる関係国の軍備，戦略，軍隊の配置や被害状況に関する情報を詳細に伝えていた。バルカン戦争の原因としてバルカン列国のトルコに対する伝統的憎悪や領土的野心またオスマン朝の軍事的大演習計画を挙げている[24]。

バルカン戦争当時の日本陸海軍のこの戦争に寄せている関心については，中村栄一の息子・中村新七の自伝である「波瀾万丈」の中で見ることが出来る。中村は当時のことを次のように述べている。

「私が生まれた一九〇八年は日露戦争後三年目であるが,欧州に於ては持既に第一次世界大戦の気配が濃厚となつて居り，バルカン半島が大戦の火薬庫視されていた頃であつた。従つて日本の陸海軍はバルカン半島の情熱には重大関心を払つて居り，欧州に駐在していた武官は勿論，欧州を旅する軍人は一応バルカン半島を視察し，当時数少い日本人であつた我が家に立寄ったもののようである。[25]」

---

[22] 小林哲之助,『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 52-53
[23] 福川秀樹　『日本陸軍将官辞典』，芙蓉書房出版，2001，pp. 716
[24] 小林哲之助,『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，1917，pp. 49-50
[25] 中村新七,『波瀾万丈』，pp. 3

日本陸軍がバルカン戦争に大きな関心を寄せていたと言える。それは欧州諸国のバルカン半島やオスマン朝に対する政策を理解することや，戦争での新しい技術，また戦術を視察のためであったと考えられる。

小林は村岡とこの時期にしばしば会談していた。村岡は実際にオスマン朝側でバルカン戦争に従軍していたため，村岡は得ていた情報が間違いなく信頼できる筋であった。小林は第一次バルカン戦争の前半期について次のようにのべている。

「敗軍の將は沈默して居るに限る。大砲はどうの，軍需品がどうの，ああやつたら良かつたらうものをとか，かうやる所であつたなどと並べるやうでは將軍としての価値の幾割は當然差引かるべきである。予は兎に角此所の光に浴し，此所の空氣を呼吸して居る以上，出來得べくんば土國に勝たしたきは是れ自然の人情である。而して今回この同盟軍を擊破したらんには土國もまた一花咲くであらうと密かに其勝利を祈つたのであつたのに，事實は全く豫想と齟齬してしまつたのである。だから此際出來るだけ沈默を守るが至當であると思つて居つた。然るに今日海岸を逍遙し，最近ダーダネルス海峽通過の許可を得，忽ち君府に集合せる列國の艨艟の堂々たる態度を見た所が残念ながら何だか急に沈默して居られなくなつてしまつた。

予は勿論最初から土國の必勝を期して居つたのではなかつたけれども其法外なる陸軍の編制を見，歲入二億五千百七十九萬餘圓に對して，軍事費七千九百八十一萬餘圓なるに驚き，また彼等が平素の練習を觀察し而して一方同盟軍なるものの由來確乎ならざるを慮り少くとも後れはとるまじと斷定せざるを得なかったのであった。然るに其結果は如何であつたか。歐州電報に依つて既に御承知の事と思ふ。新進の勃牙利軍に一も二もなく叩かれ一挙にムスタフパシヤを屠られ暫くしてキルクキリセに破れ，（キルクキリセ回復の報は國民の激昂を抑へん為めの虚報なりしとの説あり或は然らん）続いて土耳其は最初より陣地を決定せりと云ふ，今迄は兎に角，此所ではと思はしめたるルレブルガス線も遂に奪取せられ，今は君府を距る僅かに四十粁なるチヤタルヂヤ線を固守して居るに過ぎなくなつてしまつた。[26]」

戦争は小林が予想した通りにオスマン朝に不利な方向に進んでいた。同盟軍はウスクブ，セラニク，ルレブルガス地域を占領し，イスタンブルから約四十キロの距離であるチャタルジャまで侵攻する。ブルガリア軍のチャタルジャまでの侵入を恐れたオスマン朝側は仕方なくイスタンブルの安全を確保する為に列強から艦隊一隻の要請を申立てる[27]。オスマン朝及びバルカン同盟共に戦争やコレラをはじめとする疫病により多くの兵士を失い，対等な戦争を行える状

[26] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，1917，pp. 54-56

[27] BOBROFF Ronald, Russian Policy toward Bulgaria and the Turkish Straits 1912-1913, ***Russian Review***, Vol 59, 2000, pp. 86

況ではなくなった。

しかし，オスマン朝は各戦地おいてで劣勢に立たされ，これによりブルガリアのイスタンブルへの進行など周囲からの侵略は激しさを増した。それに加えてギリシャ海軍によってドデカネス諸島が征服され，ダーダルネス海峡が閉鎖される。これに関しての小林は以下のように述べている。

「最近ブルガリアを視察した人の談に依れば，ブルガリア人の鼻息の荒き事驚く可きもので，ルーマニアの如きは既に眼中にないと云ふ。併しさういふ彼等は尚未だアドリアノープルを陥し得ないではないか。尤も土耳其の方針は最初から境界線を棄ててアドリアノープル市を孤立せしめ，ルレブルガスの線で防がん計画であつたさうだから兵糧弾薬等の準備もあつたらうし，また要塞も堅固にしてあつたらうけれど，勿論たいしたものぢやない。それが未だ陥しきら存いようではブルガリア人もあまり大きい顔は出来ない。

ルレブルガス線で土耳其軍が何の為に退却したのか疑がはれて居る。さきには土耳其兵が兵糧に苦しんだが今はブルガリア軍が大に苦しんで居るらしい。彼等の大部隊がチヤダルヂヤ線の後方に退いたのは土耳其軍艦の猛射を恐れたのではなくして，軍需品の不備と續出する疫病等の為であらうと想像せられてある。[28]」

小林の記述からも分かるように，両者共に開戦当初のような戦争状態を続けて行くことが困難であったことが読み取れる。一九十三年十二月三日，ギリシャを除くバルカン同盟とオスマン朝の間に休戦条約が締結され，ロンドンで講和会議が開かれる。第一次バルカン戦争での敗戦のためオスマン朝のキアミルパシャ政権はミディエ・エネズをオスマン朝とブルガリアの境界線として受け入れようとした[29]が，オスマン朝国内でこれに対する反発が強く，実際には合意には至らなかった。政権交代後も列強の圧力は弱まる事がなく，結局翌年五月三十日にロンドン講和条約は締結される。

この条約によってミディエ・エネズを境に東をオスマン朝の領土に，アドリアノープルはブルガリアに，ギリットはギリシャに割譲された。しかし，マケドニアの割譲問題を未解決のまま残し，アルバニアは独立した。小林のこの条約についての見解は下の通りである；

「倫敦条約。青年土耳其黨内閣はキアミル内閣を覆へして政権を執りしも到底勝利覚束なきを見，ハツキーパシヤを倫敦に特派して講和促進を列強に依頼した。而して三月六日にはヤニヤ陥落し，三月廿六日にはアドリアノープル勃軍の手に帰し，また四月廿三日にはエサツドパシヤのスクタリを開城するあり，土國の形勢益々非にしてアドリアノープル府などは問題でなくなつてしまつた。遂に五月十六日再び第二講和会議を倫敦に開く事となつたが列國委員は不相變小田原評議に日を費して居るので可成速に協定せしめんと焦慮し

[28] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 61-62

[29] AKSOY, Ittihat ve Terakki Cemiyeti Tarihi, Nokta Kitap, istanbul, 2008, pp. 86

た。列強は多少の壓力を加ふる事とした。即ちグレイ外相は五月二十六日各議員を招き列強の起草せる講和条約に調印するか然らざれば倫敦を立ち去るべき旨を告げたのである。斯くて五月三十日漸く倫敦条約の調印を見るに至った。(略)土耳其はこれに依って殆んど欧羅巴から遂出されたのである。[30]」

ロンドン講和条約締結前に小林はモスクワに視察に行き，二週間の滞在でロシアの文化や政治について調査する。ロシア滞在中に第一次バルカン戦争が終結したが，マケドニア割譲問題やブルガリア・セルビア間の国境に関する問題で第一次バルカン戦争でオスマン朝に対して同盟むすんだ国々の内部で衝突が生まれ，のちに第二次バルカン戦争へと発展する。

第二次バルカン戦争ではブルガリアに対してセルビア，ギリシャ，モンテネグロ，ルーマニアやオスマン朝は攻撃する。敗戦が確定的となったブルガリアはブカレスト条約を締結する。この条約でオスマン朝が第一次バルカン戦争で失ったアドリアノーブルを再び取り戻し，アルバニアは再び独立し，マケドニアはセルビア，モンテネグロやギリシャの間で割譲される事となる。

ブカレスト条約の後に小林は村岡中佐と会合を持ち，戦争の結果について意見交換した。小林は村岡に対し，今回の戦争でオスマン朝がどの様にしてアドリアノーブル府を取り戻したのか，詳細に聞き取りを行った。

締結されたブカレスト条約によりバルカン問題は解決にいたるが，アドリアノーブル府の回収と同時にフランスとシリアに関するアナトリア地方における鉄道問題や，イギリスとのペルシャ湾問題，更にはロシアからの圧力にもさらされてしまう。オスマン朝はアドリアノーブル府を取り戻したが故に更に多くの諸問題を解決しなければならなくなる，と小林は述べている[31]。

バルカン戦争終戦後から第一次世界大戦開戦までの間に，列強はオスマン朝における利権獲得に向けオスマン朝との接触を図る。オスマン朝政府は元来ドイツで軍事教育を受けた者が多くいたため，ドイツと深い関わりを持っていた。ドイツ側はこれを利用し，バグダッド鉄道の敷設権を始めとした経済上の関係性より強固なものにしようとした。小林はドイツがバグダット鉄道の敷設権を持っていることを非常に注目している。

バグダット鉄道はペルシャ湾につながっているという点から第一次世界大戦期に非常に大きな意義を持ち，当時欧米の注目を集めていた。実際にアメリカ陸海軍もこの鉄道の視察を行った[32]。日本に於ける第一次世界大戦の外交方針としては，「バグダット鉄道に就いて，バグダッ

---

[30] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 69-70

[31] 小林哲之助，『ガラタ塔より』，大鐙閣，1918 年，pp. 89

[32] GREIGH J.P.S., NEWCOMBE S.F.i The Baghdat Railway, The Geographical Journal, Vol. 44, No. 6, 1914

ド鉄道敷設は実にインド侵略の端緒なり。墺ハンガリーを併合し土耳古を滅して，北海より印度洋に至る大帝国の建設は独逸年来の企図なり。青島に於ける施設により山東全省に対する野心を見るべく，而して山東省の併呑は全支那に対する計画の起点たり。今日に於て独逸勢力の発展を阻止するの策を講ぜずむば，帝国の支那に於ける発展は到底之を望むべからず。。[33]」と閣議決定がなされており，当時の日本に於いてもこのバグダット鉄道問題は重要視すべき課題であったことが伺える。

終わりに

この論文では二十世紀初頭の日本がオスマン帝国で行った情報活動の一例として小林哲之助の伊土戦争から第一次世界大戦の開戦までの活動を取り上げている。小林は非公式な外交官でありまた新聞記者でもあった。その独自の視点を生かしてオスマン帝国の状況を分析し，報告書にまとめている。

この時期まだ日本とオスマン朝の間に公式な外交関係が樹立されていなかったにも関わらず，日本の陸軍軍人がオスマン朝に派遣された。日本陸軍が伊土戦争やバルカン戦争に関心をよせていたことはバルカン戦争で土軍に従軍した日本軍武官の存在からも見て取ることができる。これらの情報活動の際にイスタンブルは日本軍にとって中心地としての役割を果たしたということが言える。

小林の報告の中にもこれらの軍人の影響が見られるが，小林の報告における最も優れた点は当時のオスマン朝を包括的に捉えることに成功しているという事である。また，ヨーロッパ諸国のバルカン半島やオスマン朝に対する政策の分析を含んでいる。

書き残された記述からオスマン朝が直面していた戦争，反乱や政変に関して詳細に視察されたことが分かる。小林の通信は日本に於けるオスマン朝に関する政治的，また外交上の根本的な情報に最初に触れているという点で非常に重要だと思われる。

（ウグル　アルトゥン・歴史地域文化学専攻）

[33] 鹿島守之助『日本外交史，第一次世界大戦参加及び協力問題』，1971 年，pp. 159